

## 「77年目のヒロシマ被爆建物・遺構」

市民団体代表 高谷和生

「おじさんミズ、ミズをくんできて」と峠三吉「倉庫の記録」に描かれた赤煉瓦倉庫「旧広島陸軍被服支廠」は、住宅街のなかに静かにたたずんでいた。全長約500mにも及ぶ巨大建物群は、爆心地から2.7km離れていたが、建物の鉄扉は原爆爆風で幾つもゆがんでいた。戦争遺跡保存全国ネットワーク運営委員として全国の皆さん方と「世界最大の被爆建物」保存署名運動を進める中で、全四棟を未来へ継承でき、現地で喜びを実感した。

また、広島平和記念公園東側には、今年3月小さな「被爆遺構展示館」が開館した。選考した複数候補地の一つでの発掘調査で、被爆直後の北天神町の民家が出土し、焼けただれた畳や材木、街並みの側溝等がそのまま露出展示されている。地下に眠る被爆状況を語る遺構公開の新たな一歩であり、今後の広がり期待したい。

ただ一方、戦後77年目となるヒロシマでは被爆登録建物は確実に減少し、広島サッカースタジアム建設で発見された「旧陸軍中国管区輜重隊の被爆遺構」は、日本考古学協会や被爆者団体等からの保存要望にも関わらず破壊された。行政対応の不十分さが極だった。

では、私たちの熊本はどうであろうか。空襲や熊本地震で被災した「近代化遺産の建物等」は守れているであろうか。東京の高輪築堤保存を契機として、改めて喫緊の課題となった戦争に関わる「近代の埋蔵文化財・遺跡」は適切な保護が図れているであろうか。これらは戦争という決して忘れてはならない歴史事実のモニュメントである。77年前同様に暑い夏空の下、被爆建物や戦争遺跡の調査研究・保存活用を考えたヒロシマであった。